十訓抄

大江山　―品詞分解―

和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りける

ほどに、京に歌合ありける

内侍、歌詠みに とられて、詠みけるを、

定頼中納言、たはぶれて、小式部内侍に、

「丹後へ遣はしけるに人は参りたり や。

いかに心もとなくおぼすらむ。」と

局の前を過ぎられけるに

衣の袖を ひかへて、

大江山　いくのの道の遠けれ ば まだふみも 天の橋立

と詠みかけ けり。

思はずに あさましく て、「こ

は いかに。かかる やは ある。」と

返歌 やう やは も 及ば ず、袖

引き放ち て 逃げ られ けり。

小式部、これより、歌詠みの世におぼえ

出でき に けり。

これ は うちまかせての 理運のこと なれ

ども、か の卿の心に は、これ

ほど ただ今詠み出だすべし と は、

知ら　ラ四・未
れ　尊・未　語り手→定頼
ざり　打・用
ける　過・体
に　断・用
や。　係助・疑問